

石黒鎮雄博士の明専会報記事を今一度(4)
〔1965年5月41号に掲載〕 ※当時の表現をそのまま記載しています。

郷愁

テ18 石黒 鎮雄

年に一度、たいいてい新春に近いころ、小学校時代の恩師O先生から便りをいたゞく。今年は、航空封かん

いちめんぎつしりと書きこまれてあった。その中に、「貴君も望郷の念にかられる年になったのではないかと、ふと思いました。日本人は、つまり日本人であり、故国を離れては暮せないのではないだろうか。」とあった。

これほど明確な表現でなくとも、「異国の地にあつて不自由でしょうが、お国のためにがんばってください。」というような意味の言葉は、日本からくるたいいていの手紙にのべられている。日本人のみならず、私がこの国で出あう多くの人々から、「時々ホームシックになるでしょうね。」という言葉がかけられる。実際の私は、それとは似ても似つかぬ心境にあるが、否定しても信じてもらえないし、信ずれば私の性格をい

ぶかしがられるので、このごろでは「はい、そうです。」とうそをつくことにしている。

私の学生時代、家をはなれた地で病気をしたことがある。このとき、友人のK君が「郷愁記」という本をかしてくれした。著者の名は思いだせないが、ヨーロッパに留学した日本青年が病にたおれ、サナトリウムに暮す一二年を、美しい感傷でつづつた日記であった。「一度でもよいから、日本語で話してみたい。」という一節もあつた。私よりも、もっと遠い国からきていたK君自身の郷愁

が、彼にこの本を買う気にさせたのかも知れない。のちに私が東京にでて、もう一度病気になる時、今度は研究室のY先生がこの本をかしてくださつた。さらにのち、私自身がヨーロッパにきて、二年以上も日本語を話さない生活を送つた。幸いこのときは病気をしなかつたかわり

に「郷愁記」ほどの美しい雰囲気ひたることもできなかった。

いま私の住む地域に、英独国際結婚の夫妻がいる。若い夫人はラインの河畔からきた。彼女は英国の町に住んで郷愁にたえきれない。「日本人は、ドイツ語を語せる人が多いと聞いたから……」というのが、彼女が私の家族と近づきになった動機である。私のあやふやなドイツ語など何のたすけにもならなかつたが、彼女はたゞどしい英語を中介に私の妻と話すことによつて、異郷にある者同志というなぐさめを得るらしい。私の隣家に、別の国際結婚の一家族がいる。夫人はギリシャからきて、いまは三児の母である。彼女も郷愁を、経験した一人であろうか、私達に深い同情をしめし、私の妻の親しい友人の一人になつた。

私の子供たちのピアノの先生は、ウェールズ出身の夫人である。過去の歴史がことなり、言葉がちがつても、ウェールズは英国の一部であり、汽車で半日の距離にある。それでも彼女がこの町にきたころは、郷愁にたえられなかつたという。いまは成人した彼女の子供たちが、当時、異

郷で孤独を感じたくるしみを、彼女は私の子供たちにあてはめて考へる。実は私の子供たちは平気なのだ

が、彼女はやはり深い同情をしめす。ある日、私はアメリカのテキサス高原にいた。私を案内してくれたアメリカ人のJ君夫妻は、二才と三才の男の子を同じ車にのせて、サボテンと砂の荒原を走つていた。「ぼくが少年のころ、伯父につれられてこゝへきたことがある。そのころ、この凹地は湖だつた。つり糸をたれと、大きな魚がかつた……」とJは思い出を二人の息子に話す。少年たちはそれに共感するには幼なすぎ、若い妻君も興味がなさそうであつた。私は彼が一種の郷愁にひたつてゐるのを知つた。陽が沈みかけたころ、私たちはカリフォルニア海岸へむかう道にそつて食堂をみつけた。食卓につくと、「こんな所へはるばると来てゐると、あなたは郷愁を感じるでしょうね。」とJが私にいつた。私は「正直に「いゝえ。」と答えたあと、まえのドイツ夫人の郷愁の話をした。「ドイツとイギリスでは大して遠くもないのにね……」と私が笑いかけたとき、いままでだ

まっていた大学生あがりの妻君は急にきつとなって、「私はおかしいと思わない。」といった。この言葉は、いまもはつきりとよみがえるほどに、私にとつてするどかった。Jは言葉をつづけて、「私がレイク・ホテルにいた時は、ずいぶん郷愁を感じましたよ。」といった。彼がイギリスの私の研究室に来ていたあいだ泊った宿の名である。私は、彼をあんな淋しい宿にほうりっぱなしにしたのを今さらすまなく思った。Jは、「あなたが郷愁を感じないのは、つまりあなたがコスモポリタンだからですよ」と結んだ。人は郷愁をとおして、ある土地に想いをはせる。しかし実は土地ではなく、そこに過した時代をなつかしむのである。そこには、自分を仲間はずれにしない友がいた、ひなをかばう親鳥の羽根のようにに自分をつつむ世界があった、無限の可能性を夢みる未来もあった。時がたち周囲がも早やそうではなくなったとき、あるいは突然に別の世界に入ったとき、人はそのころとの差をふと発見する。私は郷愁をそう定義する。もし、過去にそのような時代をもたなかったら、あるいはそ

の時代と結びつく土地がなかったら、人は郷愁を感じないかも知れない。幸か不幸か、私はそのどれにもあてはまるように思う。物心ついた時すでに国外にいて、現在と大差のない生活様式を経験した。日本にかえった場合もふくめて、私の周囲にはいつも「異郷人」がいた。やがてやぶれる時がくるであろうが、私はいまも少年時代に夢みた通りの仕事を順調につづけている。「お国のために、がんばる」などという悲愴感とは正反対に、魅力ある仕事を快適なかん境でたのしんでいる。「日本人は日本でなければ暮せない」のも、ある時代ある人には真理であったし、少くとも典型的な感慨であった。日本人の海外生活の歴史は浅いが、これも二代三代と重なるにつれて、かつての典型からは例外とされる場合が少しづつ増してくるであろう。私の二人の子供はすでに日本を忘れているし、あとの一人は全く知らない。それでも、私は、郷愁を感じる故郷をもつ人々を、時にはうらやましく思う。

1965

(筆者：英国国立海洋研究所主任研究員、理博)